

週刊 武四郎

第45号

2019年(平成31年)2月13日(水)
発行・松阪市

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

市助少年

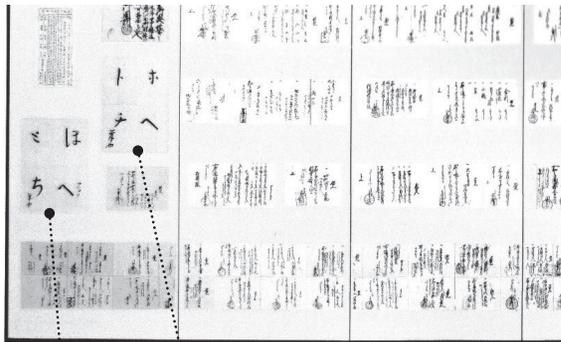
松浦武四郎さんが幕府の御雇として蝦夷地の探査をしていた時、虻田というところで市助という名の少年と出会いました。

市助の本当の名前はエカシハシユイ。アイヌの少年でした。父親は早死にして、兄と姉、そして妹がいたエカシハシユイは、落合という和人の家に行き、自ら「市助」と名乗り和人の風俗に改め、和人の言葉を学んだといひます。文字を持たないアイヌの少年は、古いお膳に砂を盛って、そこにイロハを箸で書いて勉強しました。わずか一年足らずで読み書きができるようになったそうです。

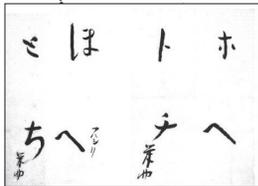
本が読めるようになった市助は江戸の絵図を見ては、「こんなに賑やかなところが本当にあるのかな」と訝しがっていました。「江戸の女は美しい」と錦絵の美人画などを見せられるけれど、赴任してきた役人の奥さんの顔を見てみたら、南部や津軽から来る「昆布取りの女」とたいして変わらないじゃないか……と市助は少年らしい正直な感想を述べています。そして、やって来た武四郎さんに、江戸に戻る時、連れて行ってもらえないでしょうか、と懇願するのです。

市助は毎日毎日、宿のこと、天候、道中で見聞きした珍しい話などを熱心に記録しました。その姿は今、私たちから見るとまるで武四郎さんそっくりです。武四郎さんは、この愛らしい少年を前箱館奉行の村垣淡路守の万延元(一八六〇)年、村垣は遣米使節団の副使としてアメリカに渡ります。この使節団で一番人気があったのがトミーと

呼ばれた立石谷次郎という十六歳の少年でした(本名が為八なので、タメトミー)。いつの時代も無垢で柔軟な少年は新しい世界との架け橋になるようです。立石谷次郎は明治時代になって「世界を知りすぎた男」としていろいろ苦労をしますが、さて、「江戸を見た」アイヌの少年は、その後どんな人生を送ったのか、今は知るよしもありません。



▲蝦夷屏風(左隻の裏面)江戸後期～明治期の仮名書きは、市助の書いた文字ではありませんが、網走場所に住むアイヌの少年、栄助の手習いの文字といわれています。(松浦武四郎記念館蔵)



▲拡大図

松浦武四郎 (1818～1888)
三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

